

をしみなく拍手を送り悴みぬ  
戸が開いて将棋倒しのスキーかな  
水噴いてゐる氷盤のゆらぎけり  
水仙や吠ゆる彼の犬ヒステリー  
あの会のこの会の世話日脚のぶ  
春の雪もつるゝほどもなく止みぬ  
春宵のこれからといふ人出かな  
壁照らすヘッドライトの花の影  
花暗くなりて夕づつあらぬ辺に  
堰に近づきてたじろぐ落花かな  
プラットのはしに下ろされ花疲れ  
初蝶を見しおどろきの声合ひぬ  
春風や頬の涙をたづねられ

春風や先争へる反古駆くる  
風車しまひに雨をさそひけり  
遠足の高校生に圧倒され  
牡丹にさす傘風に浮きあがり  
緋ふごとくゆれゆく風の麦熟るゝ  
旅の荷をほつたらかしてまず蚊遣  
バス暑し坐つてみても立つてみても  
空晴れてあまりかぼそき那智の瀧  
日射すとき底せりあがる泉かな  
縁涼しみどり児足をふんばりて  
海に捨つ反古舞ひもどる涼しさよ

二〇一七年二月二十八日